

旧約聖書における戦争

旧約聖書は戦争をどう語り継いだか

左 近 豊

レジュメ

はじめに

ロシアによるウクライナ侵攻 (東方正教会の伝統)
イスラエルによるガザ攻撃 (ヒブル語聖書とクルアーンの伝統)
西欧・米国における移民排斥、少数者差別政策の支持拡大
(構造的暴力の蔓延) (プロテスタントの伝統)

聖書的な信仰が社会に影響力をもつ地域での、聖書を盾にした暴力・戦争

1. 旧約聖書における「戦争」
歴史的背景 (古代オリエント世界)
史実性 (旧約聖書時代史)
補遺：旧約聖書と新約聖書の戦争観
2. 旧約聖書における「戦争」の語り
文学的・修辭的側面 (著者・読者・文脈)
3. 旧約聖書における「戦争」の語りと教会
解釈史・影響史 (ユダヤ教史、キリスト教史)

おわりに

主な参考文献

Niditch, S., *Ethics in the Hebrew Bible and Beyond*. New York: Oxford Univ. Press, 2024
———, *War and the Hebrew Bible: A Study in the Ethics of Violence*. New York: Oxford Univ. Press, 1993.

Zehnder M. and H. Haglelia eds. in *Encountering Violence in the Bible*. Sheffield: Sheffield Phoenix Press, 2013.

長谷川修一『旧約聖書＜戦い＞の書物』（慶応義塾大学出版、2020）

トマス・レーマー『ヤバい神—不都合な記事による旧約聖書入門』（白田浩一訳、新教出版社、2022）

佐藤潤「イスラエルによるカナン侵攻物語をどう読むか—カナン人虐殺を命じたのは誰か？—」『福音主義神学』54号（2025年）、55–73頁。

講演原稿

テーマ：聖書、特に旧約聖書は「戦争」について何を語っているのか？

1. 旧約聖書における「戦争」—その歴史的・文化的背景—

古代イスラエルを取り巻く**歴史的環境**は、戦乱渦巻く血で血を洗う現実に晒されていた。南からは大国エジプト、北からは古代メソポタミアの諸帝国（アッシリア、バビロニアなど）が常に覇権を争う回廊（現在のシリア・パレスチナ地方。学問的には「レバント」地方、あるいは地中海東岸と呼ばれる地域）に古代イスラエルは位置していた（**地政学的位置**）。地中海からの物資の流入もあり、古代オリエント世界では交易の要衝であり、大国間に挟まれたバッファーであり、緩衝地帯であり、覇権せめぎあう最前線であった。両大国のどちらもが戦略的、地政学的に確保しておきたい地域に属していた、と言ってよい。

そのため紀元前13世紀と考えられる出エジプトから紀元前6世紀（587年）までの約600有余年の間は、国内においても域内においても、国際関係においても、戦闘と殺戮に脅かされ、晒され続けた期間であり、人間観も世界観も戦争のリアリティに彩られ、深く影響を受けたものとなっていたと言えるであろう（**時代的背景**）。熾烈を極めた戦いの場、それが旧約聖書のコンテキストであるとの認識が求められる。

そのような地政学的・歴史的環境の中での、人間観や世界観が旧約聖書に反映されている。例えば創世記1章に描かれる**人間像**は「神のかたちに創造された」と繰り返されるが、それはそう言わなければならないほどに「人間」が存在の耐え難い軽さに捨て置かれ、尊厳を剥ぎ取られ、むき出しにされた存在として、自らにも見切りをつけざるをえないような「人間」観が、聖書を取り巻く世界に蔓延っていたからである（紀元前6世紀バビロニア捕囚期以降に成立した、「祭司文書」に属する創造物語）。また、これら周辺の数々の国々、中でも紀元前8世紀以降にアッシリアのもたらした**世界観**は、古代イスラエルの人たちの価値観や観点に多大な影響を及ぼした。そのため、これと対抗する言説を語るためには、圧倒的な力を持つ敵の世界観を用いるのみならず、むしろ聖書の世界の人々が、敵の世界観に絡めとられ、染め上げられないためにも、換骨奪胎して異なる真実を語ることが必須でもあった（**世俗の世界観と聖書的世界観の相克**）。

・“アッシリア・イデオロギー”との対峙（暴力的征服物語・戦争を巡って）

コレージュ・ド・フランスの教授・学長を務めた旧約学者T.レーマーは、『ヤバイ神』の中で、旧約聖書中で特に暴力的な征服物語が数多く登場する「申命記」から「列王記」までの申命記史家の手になる文書を取り上げて、この文書群の背景に色濃く影を落とすアッシリア帝国の影響を論じている¹。それによれば、紀元前8世紀～7世紀にかけての、いわゆる「アッシリアによる平和Pax Assyriaca」の下、地域を席捲したアッシリア文化とそのプロパガンダによる「アッシリア・イデオロギー」がこれらの申命記史家文書成立に絶大な影響を与えたという。

申命記史家による活動の時期は、ヨシア王（紀元前7世紀後半）の治世と重なるユダ王国絶頂期であり、祭儀と政治のエルサレムへの集中化政策が推し進められ、強力なナショナリズムが興隆した時期でもあった。申命記史家は、

1 トーマス・レーマー『ヤバイ神—不都合な記事による旧約聖書入門』（白田浩一訳、新教出版社、2022年）。

アッシリアの君主に絶対服従を求めて違反者には暴虐をもって臨むアッシリアの契約や法のモデルを巧みに形式面では取り込みつつ、そのような地上の君主を超越するイスラエルの神との契約を提示して、むしろ内容面においては反アッシリアを語るものへと逆転させた。また申命記史家は、戦士神として暴力的にカナン地の先住民を根絶するYHWH像をヨシュア記の征服物語（特に1～12章）で展開しているが、これもヨシア王治世時代の産物であり、考古学的には史実性は疑わしく、むしろアッシリアの征服物語のパターンを巧みに取り込みながら、紀元前7世紀当時のカナン支配者であったアッシリアを相対化し、凌駕するYHWHの主権を語る「カウンターヒストリー」を紡ぎ出したものとされる。「抑圧された少数者のグループが抑圧するもの自身の主張を取り上げ、それを嘲笑したり、抑圧する者に向けて投げ返す」物語として機能しているというのである²。ただし、この好戦的な戦士神としてのイメージは紀元前6世紀、バビロニア捕囚期になると「第二、第三世代の申命記史家たちによって改訂され、修正され」「武装解除」されて、ヨシュアに対する軍事的な演説は律法に関する説教へ、ヨシュアの立場も軍事的指導者から良心的なラビへと変えられた、とされる³。もはや戦争は人々のものではなく、神のものであり、しかも人間の戦争を正当化するものではなく、神の民を救うために介入される神の「解放の行為」、終わりの日には悪を根絶する神の業を物語るものへと転じられていったと言う。申命記7章の近隣諸民族の根絶命令（「聖絶」）も、レーマーによれば「実行されたことのないイデオロギー的なもの」であり、紀元前5世紀頃の読み手を対象として編まれ、古代イスラエルのアイデンティティが脅かされた時代に、「非常に防御的な姿勢をとって」「攻撃的な言葉となって」現れたものであり、共同体があらゆる仕方での存在の危機（周辺世界の文化への同化＝アイデンティティの喪失）に見舞われる中で、異質な他者を（内外に）排撃し、偏狭な自己理解（「真のイスラエル」の純潔性）に集中

2 前掲書、133-134頁。

3 前掲書、134頁。

化し、収斂しようとする際の言説とされる（エズラ、ネヘミヤも）⁴。

・旧約聖書の「暴力的征服物語・戦争」との対話

支配帝国（アッシリアやバビロニア）の物語に対抗し、それらを相対化するための物語を旧約聖書は語る。そこに「戦争」も含まれる。聖書の「戦争物語」には、アッシリアの「戦争物語」との対決がある。気をつけなければならないのは、聖書が用いている「戦争」の言説を、この文脈と切り離して、聖書そのものの「戦争」観として誤解し誤用することである。聖書は確かに史実に基づいているが、起きたことを時系列に列挙するだけの歴史資料集ではない。史実を解釈し、神学的に咀嚼して、シビアな現実世界の中を、神と共に歩み、生き延びるために紡ぎだされた命の書、信仰の規範となる書物なのである。信仰的に養いをもたらさない史料の多くは、失われた他の多くの古代オリエン特世界の文書とともに地中深く埋もれていった。今私たちの手元に命がけで受け継がれてきた聖書は、「戦争」に関しても、信仰共同体が神のみ前で生きるために刻まれた言葉に含まれる。丁寧に、慎重に、本当は何を伝えようとしているのかを信仰共同体の解釈の中で耳を傾けてゆくことが求められる。

信仰に基づいて真摯に聖書に聴くことを通して知る「聖書のイスラエル」像を一方で重んじつつ、他方、神が与えられた理性に基づく考古学や史学によって明らかにされてきた「史的イスラエル」像をも謙虚に学ぶことで、聖書を読む私たちは「イスラエル」像を巡る対話の中に招き入れられる。

後者における歴史的な「古代イスラエル」は常に弱小国として大国間の権力闘争に巻き込まれて何度も滅びに瀕した存在だったことを忘れてはならない。後述するが、Peter Craigieは旧約聖書が「敗北の物語」であることを示唆する⁵。それは勝者・強者の書ではなく、神の前に悔いえずおれざるをえない罪人

4 このような言説に対抗・並立する言説も旧約聖書中に見いだされる。例えばイザヤ書56章。あるいは創世記の族長物語などに見られる、包括的な他者理解、他民族との共存（ハガル、アビメレク王、さらにはヨセフ物語）も挙げられよう。

5 P. Craigie, *The Problem of War in the Old Testament* (Grand Rapids: Eerdmans, 1978),

であることを語る書ということであろう。歴史的にも地政学的に周囲の大国の意向に翻弄される小国であり、例外的に、例えばダビデ・ソロモン時代（紀元前1000年頃）、およびウジヤとヤロブアム2世の時代（紀元前8世紀。アッシリアによる北王国滅亡前）の一時期は、周囲の国々との戦いに勝利して領土を広げたこともあったが、それは、地域の覇権を握るメソポタミアとエジプトそれぞれの内政の混乱期でレバント地方に権力の真空状況が生じていたために可能であったに過ぎない。それ以外は、常に地域のパワーバランスに翻弄されていた。そのような歴史的現実の中での「戦争」理解が求められる。

補遺：旧約聖書と新約聖書の戦争観・暴力

旧約聖書は血みどろの戦乱や皆殺しとか野蛮で正義のためならば容赦しない（＝聖戦）、新約聖書は敵を自分のように愛せ、右の頬を打たれたら左の頬を差し出せという教えがあるように非戦、非暴力だ（＝平和主義）、と単純に考えることは、聖書の読み方としては表層的、皮層的なものと言わざるを得ない。残念ながら日本の知識人の中にも、また教会の中にさえもそのような浅薄な見方が強くあることにしばしば愕然とする。

そもそも新約聖書にも戦いのモチーフがあり、暴力の中にキリスト教は成立したと言える。パウロは、権力者の暴力装置については許容する言葉を残している「権力はいたずらに剣を帯びているわけではなく、神に仕える者として、悪を行う者に怒りをもって報いるからです」（ローマ13：4b、以下、引用はすべて日本聖書協会『聖書 聖書協会共同訳』）と。イエスキリストご自身は宮清めにおいて破壊的な行動を起こされたが、むしろローマ帝国の暴力的な政策（徴兵等のための住民登録）のただ中でお生まれになり、構造的暴力（貧困、差別、排除、偏見など）に晒された者たちの友となられ、そして激しい暴虐（不正な裁判、十字架刑）によって命を奪われた方だった。クリスチャンは、「あなたも見ていたのか、主が木にあげられるのを…主が釘をうたれるのを」

(讚美歌第二編 177番より)と問われ、私もそこにいた。私も主を十字架につけた張本人だと、深い罪に震えながら告白するものである。暴力は我うちにあり、神の子をさえ亡き者にしようとする不埒者であることを深く悔いるものである。十字架を背後に逃げ去った弟子たちと共に、我身可愛さに不当なる出来事に目を瞑り、構造的暴力に加担したものたちといえる。綺麗事ではない。私たちの罪とは、キリストを愚弄し、貶めて殺し、神を私たちの領域から全身全霊で排除することに極まった。暴力に嫌悪感を抱きながら、心の中で、あるいは物理的でなくても言葉で誰も傷つけたことのないものは一人だにいないであろう。暴力も戦争も、御子イエスのほかは誰も無縁なものはいない。聖書は旧約聖書も新約聖書も、本能的に他者を排除し、抹殺する人間のありのままの姿を露わにし、これを直視し、向き合い、自らをその刃に刺し貫かれる御子によって、本能の奴隷、罪の縄目にがんじがらめにされている者たちを救い出し、聖霊によって聖化し、造り変え、栄光から栄光へと、そして終わりの日には、御子の執り成しによって御前に立つものへと贖ってくださる神を証しする。旧約も新約もこの救いにおいて一貫している。

また旧約聖書のイザヤ書には剣を鋤に、槍を鎌に変える永遠平和の思想や、申命記やアモス書、イザヤ書、エレミヤ書、詩編などには寡婦や孤児、寄留者の権利と人権が守られる社会の形成を迫って、構造的暴力の欺瞞を暴き、その徹底的な否定を含む真のシャローム（平和）を究極的には求める思想が貫かれている。新約聖書の語る「キリストの平和」の思想と一貫しているのである。

「戦争」について考える時、旧新約聖書を両方共に「信仰の規範」、「正典」として信じる信仰に立つことが求められよう（2世紀の異端マルキオンの轍を踏まないためにも）。

2. 旧約聖書における「戦争」の語り（特に「聖絶（ヘレム）」に関して）—文学的・修辭的側面（著者・読者・文脈）—

旧約聖書における「戦争」の記述は、旧約聖書学において歴史学的検証の対象とされ、史実性や戦闘におけるロジスティクス（武器や戦術）に関する議論

などもなされてきたが、聖書を信仰共同体の価値観や倫理観、思想・神学を形成する“物語”として読み継ぎ、「神の民」のアイデンティティを代々にわたって醸成してきた書としての側面（文芸学的側面）に注目する研究もなされてきた。たとえば戦争におけるYHWHの参与、戦士神なるYHWHについての神学的考察や、「神の民イスラエル」の戦争観などについてである。

ただ、もっとも議論に困難を極めてきたのは、「聖絶」（ヘブライ語で「ヘレム」）と呼ばれる敵（身内の敵も含めて）の根絶・容赦ない徹底的な殺戮に関する神の命令とその実践に関しての記述である。申命記20章の戦争の規定や民数記31章のミディアン人との戦闘記述、士師記19-21章のベニヤミン族の蛮行に対する成敗と戦闘に参加しなかったヤベシュの住民の聖絶、ヨシュア記におけるアカンの罪に対する聖絶（7：24-25）などが挙げられる。現代の倫理観からは到底受け入れられない暴力の濫用であり、またキリスト教史における悍ましい記憶（十字軍によるイスラム教徒虐殺やネイティヴ・アメリカン殺戮の典拠とされた）への反省などから、「聖絶」をどのように現代の神学が理解するのか、倫理的葛藤を引き起こすものと言える。

旧約聖書学の研究史においては、「聖絶」について倫理的判断を棚上げする傾向も見られた⁶。J. Pedersenは、イスラエルが文化的アイデンティティや政治的サバイバルが危機にさらされた時期に、人々に訴えるための極端な愛国主義として例外的なものと理解する視点を提示した⁷。T.R. Hobbsは、幼児まで聖絶の対象とするのは、私たち現代人と違い、文化も異なり、倫理も異なる原初的なイスラエル人のもの、として特殊性を強調した⁸。戦争そのものは古代イスラ

6 Susan Niditch, *War in the Hebrew Bible: A Study in the Ethics of Violence* (New York: Oxford Univ. Press, 1993)、およびWilliam L. Lyons, *A History of Modern Scholarship on the Biblical Word HEREM: The Contribution of Walter C. Kaiser, Jr., Peter C. Craigie, and Tremper Longman, III*. (New York: Edwin Mellen, 2010)参照。

7 Johannes Pedersen, *Israel: Its Life and Culture, vols 3-4* (London: Oxford Univ. Press, 1940), 1-32.

8 T.R. Hobbs, *A Time for War: A Study of Warfare in the Old Testament*. (Wilmington:

エルにとって大した問題ではなく、当時の人たちの生活の一部に過ぎないものと受け止める立場もあった。

それに対して「聖絶」を神の裁きの神学の範疇で捉える立場W. Eichrodt, P. Craigie, G.E. Wrightらが採っている⁹。その中でも（保守的な神学を展開した、英国の旧約学者）Peter Craigieは、神の裁きと贖いの目的に神が用いる必要悪とする立場を提示した¹⁰。聖絶も、神がその意志を実現するため、あるいはより大きな悪を除去するために採用されるときのみ妥当性を持つとした。

Paul Hanson（ハーバード大学）は、聖絶の伝統について納得するのは難しいことを述べ、それまでになされてきた聖絶に関する議論そのものを退ける（原初的イスラエル人の性とするもの、神の裁きの神学に属するものとするなど）。Hansonは、「聖絶」そのものに注目することから、むしろ抑圧からの解放のテーマや混沌からの創造のテーマをより重要なものとして主張し、戦争は、真のシャロームを構成する義と憐れみと解放をもたらしただけで評価されると述べる。そして旧約聖書における「聖絶」全てを批判的に論じ、「勝利至上主義的王権イデオロギー」「十字軍的メンタリティ」として退ける立場に立つのである¹¹。

旧約聖書における戦争について複数の著作のあるSusan Niditchは、たしかに旧約の様々な戦争イデオロギーは古代イスラエルの文化に依拠し、現代とは異なる倫理観があることは認めつつも、それでも旧約聖書自体が「聖絶」の倫理について実際に苦慮しており、聖絶の正当性に疑念を持っているものさえあることに着目し、この主題を改めて考察する¹²。「聖絶」に関して、旧約聖書は

Michael Glazier, 1989), 17, 211.

9 Walther Eichrodt, *Theology of the Old Testament*. (Philadelphia: Westminster, 1961), 140; Craigie, *Problem of War*, 74; G. E. Wright, *The Old Testament and Theology* (New York: Harper and Row, 1969), 129-137.

10 Craigie, *Problem of War*, 54, 63, 74.

11 P.D. Hanson, "War, Peace and Justice in Early Israel," *BR* 3 (1987), 32-45.

12 Niditch, *War in the Hebrew Bible*, 9-10.

一様の視点でのみ描くのではなく、その語り自体が多様であり、その視点や倫理に揺らぎがあることに言及する。歴史記述というものは、記述した者の視点を反映するからである。記述の背後にあるさらに多くの歴史的事象については、その著者自身や属する学派などに影響受けて史料を残し、編み合わせたことには疑いようがないため、「聖絶」に関する倫理的視点も、当然複雑なものとならざるをえない、というのである。

例えば、聖書における最初の戦争に関する記述である創世記14章の「アブラハムによるロト救出戦」についての議論のポイントは、これが史実であるか？もしそうなら、いつ、だれが関わったのか？本当の戦争ではなかったとしたら、イスラエル史のいつ頃の具体的な戦争の知識をもって著者はこのテキストを残したのか？エピック、伝承、民話、歴史物語などどのジャンルに属しているのか？著者はそもそも歴史を書こうとしているのか？テキストは何らかの戦争への態度を表明しているのか？そのような態度をもつ著者とは誰か？いったい何人のどれだけの歴史がこの記述の背後にあるのか？といった考察のポイントが挙げらる。

Niditchによれば、このロト救出戦物語が、いかなるジャンルに属するものであれ、あらゆる戦争テキストと同様に、その著者のイデオロギー、世界観、態度が現れているという。創世記14章は、アブラムの戦いをどのように著者が描いたかの記録である、と。すなわち、アブラムを近隣の（戦争を司る）王たちと同列に扱い、自衛的で、不義を正す目的で戦争を行い、戦争によって利をむさぼることのない人間として描く。ここに戦力をモラル目的で用いることが大事だと言う著者の戦争観が現れる、と¹³。

・申命記20章は、非物語的ジャンルにおける戦争についての記述である。実際の戦争について何等かを語っているのか？20:10-18は矛盾する規定を含んでおり、敵が降伏することと生かすことを認める規定と、徹底的に敵を殺し尽す要求が併存している。地理的に近い敵に対して厳しい扱いが15節には伺われ

13 Niditch, *War in the Hebrew Bible*, 11-12.

るものの、この線引きは一貫したものとは言えない。他の戦争テキストでは必ずしも遠近で考えられていないからである。ただ、戦争法というより、矛盾する戦争イデオロギーに対する調和の試みと言える¹⁴。

敵は徹底的に根絶されるべき。彼らは神の正義の下では罪人ゆえ。イスラエル人は神の正義の道具と見なされ、敵は人間以下の怪物とされる。敵は汚れており、その汚れは人間以外の戦利品をも汚染している。それがイスラエルの同胞であれば、内なる敵として適用される。

紀元前7世紀の宗教改革期では特に、この神の義としての聖絶の思想は適切なものとなされた（申命記神学）。人間供犠を好む神というのは、この申命記神学では忌むべきものであったが、イスラエルを「祭司的存在」とする申命記的観点においては有効であり、偶像崇拜に染まった敵（身内も含めて）が断たれることは当然と考えられた。大国による攻略下にある社会として、イスラエルは聖化され、汚染から清められねばならなかった¹⁵。

・民数31章（祭司文書）にはメディアン人との戦闘が描かれる。祭司ピネハスが軍に派遣されており、実際の戦闘ではありえない展開となっていることがわかる。この戦闘では、男は全員殺害、女性と子どもは捕虜とされ、街は破壊される様子が描かれる。ただし帰還後モーセによる叱責がなされ、なぜ聖絶しなかったかが問われる。そして男児と未婚女性以外の女性の殺害が命じられる。さらに奪ってきた金銀青銅などは精錬され「清める」ことが求められる。衣服も含めて清めの水で清めることを祭司エルアザルが命じる。その上で略奪品の分配（その中に未婚女性らも含まれる）がなされる。

民数31章における祭司的戦争イデオロギーは、神の正義としての聖絶との類似を明らかにする。敵は、神の復讐にふさわしいものと見なされ、ほとんど根絶されるが、未婚女性は免れる。王国時代以降の祭司的強調である清さと不浄さの強調がこのイデオロギー全体を枠づける。男性と関係を持っていない女兒は清いとされ、敵とはみなされない。或る程度の清めの期間の後にイスラエル

14 Niditch, *War in the Hebrew Bible*, 12.

15 Niditch, *War in the Hebrew Bible*, 12-13.

人に吸収されうる。戦利品も同様。清めの期間の後に神、その祭司、そして人々の使用に供せられる。この清めに関する考えは申命記における神の義としての聖絶よりも民数31で強調される¹⁶。

・士師記19-21章 ベニヤミン族の犯行と成敗（町の人々から家畜に至るまで見つけた者はすべてを剣で撃ち、見つけた街すべてに火を放った。ベニヤミン族との婚姻関係の禁止）。さらに戦闘に加わらなかったヤベシュの住民の聖絶（未婚女性以外）。その上で未婚女性らをベニヤミンの生き残りにあてがう。さらに足りない者にはシロの祭りで女を手籠めにすること提案。ただし、この物語の枠には「おのおのが自分の目に正しいと思うことを行っていた」（21：25）との評価がある。著者は部族関係に基づいた社会システムから王政への移行期の錯乱状態として描いていることが分かる¹⁷。

また、ヨシュア記6章のエリコ攻略に関して、史実性は否定されており、明らかに祭儀的記述と言える。類似する記述として、出17：8-16、ヨシュア8：18-19、10：12-14、サム上7：9-11、歴代下20：20-30などが挙げられる。いずれも奇跡物語であり、人の介在なしに城壁が崩れ、約束の地が神の御業による嗣業の地であることを語るものとなっている。

3. 旧約聖書における「戦争」の語りと教会 解釈史・影響史（ユダヤ教史、キリスト教史）

聖書は信仰の規範としてユダヤ教、キリスト教の歴史において読み継がれてきた。旧約聖書の「戦争」についての語りも含まれる。ただ、旧約聖書における戦争の記述、とくに「聖絶」の描写については、その書き手、読み手、共同体の置かれた文脈、思想的・神学的意図などが複雑に錯綜しており、“旧約聖書の戦争観”として括することは本来、困難である。それぞれのテキストは、圧倒的で支配的な帝国のイデオロギーや世俗的世界観に対する聖書的な対抗言説であったり、神の民のアイデンティティ喪失の危機に対峙する存亡をかけた格

¹⁶ Niditch, *War in the Hebrew Bible*, 14.

¹⁷ Niditch, *War in the Hebrew Bible*, 16.

闘的語りであったり、祭儀的イデオロギーの修辭的表現であったりするため、それぞれの意図を歴史批判的、文芸学的方法を用いて丁寧に考察する必要がある。けれども、痛ましく、またおぞましいことに、この手続きを経ずに、しかも敗北を抱きしめた民の物語である聖書の語りを迂回し、あるいは無視しして、故意に誤読してこれらのテキストを征服者の物語として誤用してきた解釈史、影響史を教会は持っている。

例えば、旧約聖書の民にとっての宿敵「アマレク人」に関する記述をネイティヴ・アメリカンの殲滅の正当化に用いた説教者が少なからず存在した。「主の座に齒向かう手。主は代々アマレクと闘われる」(出17:16)との聖書箇所(モーセの両手をアロンとフルが支えている間、ヨシュアが戦闘に従事する物語)がある。これが申命記では、出エジプトの際のアマレクの行状を「思い起こせ」、疲れ切っていた時に後方にいる者たちの背後から襲い掛かり「神を畏れることがなかった」「アマレクの記憶を天の下から消し去りなさい。このことを忘れてはならない」(申命25:17~19)とされ、ついにサムエル記では、サウルへの聖絶の命令へとつながってゆく。その際に、出エジプトでの妨害への罰とされ、「さあ、行ってアマレクを討ち、アマレクに属するものは全て滅ぼし尽しなさい。容赦してはならない。男も女も、子どもも乳飲み子も、牛も羊も、らくだもロバも撃ち殺しなさい」と。サウルは良いものは全て惜しくなり、滅ぼさず、つまらない、値打ちのないものだけを滅ぼし尽した。するとサムエルは、主に聞き従わないサウルを叱責。反逆は占いの罪に等しく、強情は偶像崇拜に等しい。主の言葉を退けたので、あなたを王位から退けられた、とまで徹底的な聖絶の実行が要求される。

この一連の記述を受けて1689年9月1日のCotton Matherの説教がなされ、そのメッセージに「兵士たちは勧められ、慰められた」という¹⁸。すなわちNew Englandでのネイティヴ・アメリカンとの戦いに臨む軍に対して、彼らに殺された愛する友人に触れながら、神の加護と要求を受けて戦う戦士たちを

18 Niditch, *War in the Hebrew Bible*, 3.

鼓舞する説教であった。その際に荒れ野でアマレクと対峙したイスラエルになぞらえて、身と魂を清めて敵と相対することを勧め、アマレクは復讐と完膚なきまでの破滅にふさわしいと語る。「風に吹き飛ばされる塵のごとくに打ちのめせ！」消し去れ、滅ぼし尽し容赦するな！と。クリスチャンを殺した者たちとして、先住民たちは万死に値すると糾弾される。神を畏れず、神の決定に逆らってイスラエルに立ちはだかる原住民アンモン人、アマレク人として、先住民は殲滅されるべき、と。

他の説教家たちも、イスラム教徒に対する十字軍、非ピューリタンに対するピューリタンの戦いなどでも同じ論理で「聖絶」としての虐殺を正当化してきた歴史をふまえて「カナンにおいてイスラエルの敵を滅ぼした神の憐れみに感謝」と言ってネイティヴ・アメリカンに対する戦いを正当化した……¹⁹。

これは聖書を愚弄し、神を冒瀆し、教会の徳を踏みにじる読みに他ならない。ただ、この過ちから完全に自由であるか、常に顧みる必要がある。み言葉によって常に改革される信仰によって、神学的に相対化され続けるために、旧約聖書を総体的に読み続けることが求められよう。

ラビの伝統にある天使の歌に紅海で沈みゆくエジプト軍を嘆くものがあることをNiditchは思い起こさせる。「わが手の業が海に沈めたのに喜びの歌を歌うのか？神は悪人の滅びを喜んではいない」と²⁰。エジプト人はその報いを受けて当然だが、彼らも神の創造物であり、神の子らである、という視点である。

旧約聖書の戦争理解において、負けた敵の苦しみへの憐れみの視点は失われない。抑圧的な権力に対する神の戦いによってもたらされた、ご自身の民の解放において味わわれた喜びは、敵のための悲しみをも喚起させるのである。

旧約の戦争伝承は本質的に憐れみと敵意の問題に真正面から取り組んでいることを、常に心に刻みながら「旧約聖書における戦争」について考えてゆきたい。

19 Niditch, *War in the Hebrew Bible*, 3-4.

20 Niditch, *War in the Hebrew Bible*, 150.